

採品、および、台湾台中市東海大学の王忠魁教授からの同定依頼品のうち、ヒヨウタソゴケ科およびカサゴケ科の分布上めぼしいもの、および、それらに関連する分類学上の問題について述べる。

これらのうち、89. *Pseudopohlia bulbifera* については少しくわしくのべる必要がある。本属には、アジアから2種、中央アメリカから1種の計3種が従来知られているが、その外見も葉の形態もヘチマゴケ属 (*Pohlia*) とよく似ていて、属としての区別が困難のように見受けられる。しかし、比較的太くて直立する短頸のさく果は著しい特長を持っている。すなわち、外さく歯は短かく、ヘチマゴケ属の16個に相当するものが2個ずつ対をなして結合して8個となり、その上部にさけ目があること、内さく歯と間毛とが区別しにくく、一様にその先端が糸状になることなどである。

フィリッピン産の *P. bulbifera* と中国雲南省産の *P. yunnanensis* とは、それぞれタイプを調べてみても、ほとんど差がみつかないので、当然同一種とすべきものである。また、インドやネパールから知られていた *Brachy menium microstomum* は、そのタイプは上記2種よりはかなり小さく、また、さく果が破損していて、さく歯の重要な特長が調べられなかったが、他に多くの標本が得られ、また、大きさには多くの移行形がみられるので、同一種とみられる。本種は現在のところ、南～東南アジアの温帶～亜熱帶種とみなされる。

91. *Bryum auratum* はアフリカから新しく知られ、96. *B. Soulii* と 97. *B. homalobolax* および 98. *B. russulum* はアジアから新しく知られるものである。92. *Bryum gedeleanum* と 95. *B. sandii* とは従来ジャワからのみしか知られていなかった。セン類には分布の広いものが非常に多いことがだんだんわかってくる。

□Department of Medicinal Plants, Thapathali, Kathmandu, Nepal: **Medicinal Plants of Nepal** Text 153 pp., 27 pls., Index 21 pp. 1970. Rs. 15. ネパールで用いられている薬用植物393種が解説され、その大部分はネパール産である。各植物のネパール名、学名、簡単な解説、利用部分と用途、分布、代表的な産地が記されている。近年医薬原料植物をネパールに求める動きが目立ち、それについての問合せが多く寄せられていることが、この本を出版させた動機の一つである。Mrs. T. K. Rajbhandary によって約650の土名が学名と対比されており、薬学関係者のみならず、ヒマラヤの植物の研究者にとっても有用であろう。巻末に主要な薬用植物の年間輸出量を示したリスト及び学名の索引がある。本文の配列はネパール名のネパール語アルファベット順であり、ネパール植物名のABC順索引が無いので大変不便なものとなっているのが惜しい。またネパールでは同じ植物でも種族によって名前が異なるので、どの種族の名前かを示すことが必要だろう。入手希望の方は、頭書の所へ申込みばよいが、輸出価格は未定である。

(金井弘夫)